

## 額田王「秋の風吹く」歌の特質

森

斌

### はじめに

額田王は、万葉に長歌二首を含めて十二首の歌を残している。そこからは多面的な作家活動が知られるのであるが、初期万葉の歌人と同様に生没年も未詳である。しかし、初期万葉の歌人にもかかわらず、額田王は当時の結婚適齢期といわれる皇極朝から、六十歳代であろうと思われる持統朝までの息の長い歌作活動による作品が知られるのである。ところで、額田王の出自は、研究が盛んであるにもかかわらず不明であると言わなければならぬ。それは、王自身に関する資料の余りにも乏しいことに由来するのであるが、歌も代作であることも含めて、その資料としての性格が問われている。例えば万葉集巻四（巻八にも重出）に残された鏡王女との贈答歌とも見做される、

額田王の近江天皇を思ひて作れる歌一首

君待つとあが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く（四八八）

が、近年になり額田王の実作であることを、伊藤博氏に疑われている<sup>(1)</sup>。疑われる必然性があるのか否かを含めて、本論は引用した額田の歌「秋の風吹く」の特質を探ってみたい。

さて、額田王の歌は、多面的な特徴を見せているのであるが、確認したい最も大切な問題として代作がある。そこで、代作歌人という事を次節ではまず考察したい。

### 一、代作歌人

万葉集巻一には、額田の歌として長歌二首、短歌五首が収められている中で、長歌と反歌一首（一七、一八）短歌二首（七、八）に作者の異伝が記されている。いずれも題詞には、額田の歌とありながら左注が皇極天皇（斉明）や

天智天皇の御製とあり、形式作者に天皇を、実作者に額田王を考えるのである。

代作歌人と額田王を規定したのは、折口信夫氏である。<sup>(2)</sup>

その後さらに折口説を發展させているのが伊藤博氏である。<sup>(3)</sup>伊藤氏は、代作を王が天皇の立場にたち、その心境になりかわつてうたつたために、この異伝が生じたものと説明して、さらに「集団的に心が融合し天皇の心に成り代わつてことばを発する」と説明する「御言持」を額田の立場に加えている。一方、「詞人」としての立場から額田の代作を考えるのは、中西進氏である。<sup>(4)</sup>さらに氏は、「王が舎人の位置にあつて、その具体的な職掌が詞人という働きにあつた」という。「詞人」と言う言葉は、日本書記にも記載されている。即ち、顯宗紀に清寧五年のこととして挿入されている歌謡、

大和辺に 見が欲しものは 忍海の この高城なる  
角刺の宮(八四)

の作者として登場している。

「詞人」の意味として、土橋寛氏は「専門の歌人というほど」としている。<sup>(5)</sup>これらは「御言持」にしても、「詞人」にしても言語にかかわる専門的な言い方であつて、「御言持」が呪術的な要素、乃至宗教的な性格を含み持たせてい

るのに対して、「詞人」が歌を専門に作る意味を前面に持たせている。どちらにしても代作歌人とは、菅野雅雄氏のいう「歌を作ることをもつて宮中に奉仕し、公的行事に当たつて、天皇の代りに歌を作る歌人」と説明されることになる。<sup>(6)</sup>天皇の代りに歌を作るのであるが、王の代作は全てが或る土地を去る時に作られている。とすればこのことが「御言持」が適當か、「詞人」が相応しいかの判断につながるのではあるまいか。

①秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の京の仮廬し思ほゆ(七)

②熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(八)

③味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際にい隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく雲の 隠さふべしや(一七)

反歌

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや(一八)

①の「秋の野」の歌は、追想の内容にあつても本質が土地誉めである。また、③の歌もこれから去ろうとした大和

を褒めたたえたものである。②の「熟田津」は、船団が出発する合図の歌とされる。しかし、「月待てば潮もかなひぬ」と言うのであるから、月と潮とがよろしい時と場所の意があつて、間接的でありながらも土地誉めが歌に含まれている。

これから帰納されるのは、歌が専門的で上手いからということも大事な事柄であろうが、むしろ言葉の呪術力に負う内容で形式作者たる天皇によつて要請されたのではないか、ということである。即ち、宇治、熟田津、大和という地を去るにあたり要請されているのであるから、土地誉めという言葉の持つ呪術が考えられてよい。とすれば「詞人」というよりも「御言持」が適当な言葉である。

さて、代作歌人というものは、額田の代作歌の題詞と左注との記載と異なり、形式作者が題詞に載せられているのが常識なのであるまいかとする疑念を、菅野雅雄氏が指摘している。<sup>(7)</sup> 題詞と左注との作者の有り様も特殊なのであるが、何気なく記されている額田の題詞にも特徴が見られる。

## 二、題詞

題詞というものは、形式があつて記されているのであろうが、ときどき一見して極当たり前と思われながら、特徴

のあるものも見いだされる。類型を二つ組み合わせている、讃岐国安益郡に幸しし時に、軍王の山を見て作れる歌

### (五)

麻統王の伊勢国の伊良虞の島に流さえし時に、人の、  
哀傷して作れる歌(二三)

などは、巻一では珍しい例になる。即ち、「誰が……して作れる歌」と「……の時誰が作れる歌」という形式は雑歌でも当たり前かもしれないが、この二つを一つにした題詞の形式が巻一で稀なのである。

巻一の題詞でめずらしいと言うのであれば、額田王の作である、

天皇の、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と  
秋山の千葉の彩とを競はしめたまひし時に、額田王の、  
歌を以ちて判れる歌(十六)

も、「……時誰が作る歌」「誰が……して作る歌」という二つの題詞形式を合わせていることと、巻一の題詞の中では異例に歌の事情を詳しく説明していることで注目される。

ちなみに四八八番の題詞は、

……の(が)……を思ひて作れる歌

と言う形式になる。しかも、誰が誰をと言う箇所は、固有名詞を入れ替えることで様々に発展しそうである。しかし、

この形式は存外に用例が少ない。額田王の題詞とまったく同じ形式であるのは、卷二の相聞にある。

五) 磐姫皇后の、天皇を思ひて作りませる御歌四首(八)

が唯一と言って良い。また、それに準じている題詞としては、

但馬皇女の高市皇子の宮に在しし時に、穂積皇子を思ひて作りませる御歌(一一四)

を取り上げられる。

題詞の形式として卷二にある磐姫歌と但馬歌のそれに類似しているのは、共通した内容があるためでなからうか。

即ち、磐姫にしても但馬にしても、この題詞の背景にあるのは恋物語である。磐姫と仁徳天皇との物語は、記紀にも語られているが、万葉とのずれはその嫉妬の激しさにある。万葉の磐姫はあれこれ悩みながら待ち続ける貞淑な妻であるのに対して、記紀のそれは古代でも珍しい程の激しい嫉妬を見せていて特別な女性である。万葉と記紀とでは物語の内容に質の相違を認められるが、一方物語の方法でも質の違いを見せている。記紀の歌謡には感情の表現が試みられていても、話の筋的なことまでも語ろうとしていない。ところが万葉では、短歌四首の構成で粗筋までも語ろうと

している。それは、中国詩に学ぶものであろうし、さらに連作体の試みでもあろう。

また、但馬皇女は高市皇子の妻であったが、同じく異母兄であった穂積皇子と世間で評判になった恋をしたことが一一四番の題詞から読み取れる。さらに題詞からは、その登場人物として高市と穂積、そして但馬と言う三人が考えられる。しかも但馬が穂積を思つて作つた題詞と歌(一一五、一一六)を加味する時、この恋物語は高市の妻でありながら異母兄に心惹かれ、夫と別れる決心をしながら、ことが露見して人の謗りを受け、結局悲恋物語であつたらしい。

以上の引用した磐姫と但馬の題詞を参考にしてきた時、額田王の題詞は明らかに物語の背景を踏まえていると言わなければならない。即ち、それは、天智天皇と額田との恋愛物語である。さらに次に額田歌四八八番と贈答の如く載せられていた鏡王女の、

鏡王女の作れる歌一首

風をだに恋ふるは羨し風をだに來むとし待たば何か嘆かむ(四・四八九)

とある歌と題詞を参考にした時、そこには当然歌によつて心が知られるのであるが、さらに題詞によつて少し粗筋も

見えてくる。額田が天皇の訪れを一日千秋の思いで心待ちにしているのに、鏡王女は既に寵愛の衰えてしまっていることを自覚しているが如く額田を羨ましく感じている。一人の男性をめぐる二人の女性が絡む歌物語が読み取れる。ここに至れば男性二人に女性一人ではあるが、自然に参考になるのは、

天皇の、蒲生野に遊獵したまひし時に、額田王の  
作れる歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る  
(二一〇)

皇太子の答へませる御歌

紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめ  
やも(二一一)

という巻一に収められた贈答二首の背景と表裏をなしていることである。それは公的な歌物語に対する藪の歌物語と言ふ意味と、積極的に振る舞う女性と待ち続ける内省的な女性という対照を意味する。

さらに巻二に収められた、

天皇鏡王女に賜へる御歌一首

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあら  
ましを(一は云はく、妹があたり継ぎても見むに 一

云はく、家居らましを(一九一)

鏡王女の和へ奉れる御歌一首

秋山の樹の下隠り逝く水のわれこそ益さめ御思よりは  
(一九二)

も、天智と鏡王女の贈答歌であるし、また歌物語の構成になつていたのであるから、巻四の物語の背景として配慮しなければならぬ。

題詞からは、巻一蒲生野の歌と巻四秋風の吹く歌とは、それぞれ歌物語の背景が考えられることになる。ではその背景の歌物語とはどういう内容が想像できるのであろうか。

額田王は、日本書記にある如く最初に大海人皇子の寵愛を受けて、十市皇女を生んでいる。しかし、万葉集からはその後大海人の兄である中大兄皇子に愛された。この恋愛は、額田王にとって夫を変えるものであるから、当然天智と大海人の関係も緊張したものになる。ところが、天智天皇七年の五月五日に蒲生野で葉狩がおこなわれた時、曾ての夫であった大海人皇子との贈答歌が残された。これを歌物語の背景で説明するのであれば、天智の寵愛を受けている額田に袖を振り求愛するのであるから、憚られる内容になる。しかし、これが事実であればそういうことなのであろうが、物語としてはすこぶる興味の対象になる。即ち、

昔はどうであれ人妻である額田に「袖振る」のであるから、額田が天智である「野守」が見ているではないか、と論ずることになるが、この物語の享受者達にとつては緊張に満ちたすこぶる楽しい話題である。額田をめぐる天智と大海人との不和がこの歌物語の筋にあったのであろう。

ちなみに巻一にある中大兄の三山歌（十三）は、天智と天武と言う男二人と額田と言う女性一人の争いと考えられるし、巻四の物語からは天智をめぐる額田と鏡王女と言う二女が一人の男をめぐる争いとも見做し得ることになる。

二男一女の三角関係の話に対して、二女一男の恋物語が額田と鏡王女に対する天智に存在していた。この話は、もともと歴史的事実というよりも、天智と藤原鎌足という二人の男性に愛された鏡王女の物語からと、蒲生野の恋物語からの派生かもしれない。古代の英雄とは、仁徳にせよ、雄略にせよさまざまなロマンスが歌と共に伝えられている。その意味では、天智天皇は万葉集に登場した最後の古代英雄であったことになる。

以上題詞の特徴から磐姫皇后歌四首と但馬皇女歌も参考にして、歌物語の筋を想像してみた。天智を慕う妻額田は、同じく天智を愛する鏡王女とはライバル関係にある。しかし、額田の天智を慕う気持ちは、あくまでも受け身の立場

でありながら、献身的である。鏡王女は表面的には諦めているのに対して、しかし額田王は磐姫のそれと同じく直向きである。

### 三、秋の風

さて、四八八番の歌は、解釈に問題がある。それは、「秋の風吹く」の箇所、大きく二つに考えられる。一つが「秋の風」を言葉どおり理解する解と、もう一つが風を恋人の来る前兆と見做す解である<sup>(8)</sup>。

ところで、「君待つと」の歌の第五句の原文が「秋風吹」とある。この第五句は、巻八の重出歌に「秋之風吹」と原文にあるため「秋の風吹く」と訓まれている。万葉集では、格助詞「の」を用いない「秋風」が歌語として普通であつて、「秋の風」は特殊な言葉になる。

①わが背子を何時そ今かと待つなへに面やは見えむ秋の風吹く〔秋風吹〕（八・一五三五）

②恋ひつつも稲葉かき分け家居れば乏しくもあらず秋の夕風（十・二二三〇）

③秋の花咲きたる野辺にひぐらしの鳴くなるなへに秋の風吹く〔秋風吹〕（十・二二三二）

額田の歌を除き「秋の風」は、①と③の二首に用いられ

ているが、同類のものとして②の「秋の夕風」(二二三〇)も参考に取り上げた。それにしても「秋風」が集中で五十四首に用いられていることを考える時、「秋の風」はやはり特別な歌語ではあるまいか。それは、「秋の風吹く」が後世に「秋風ぞ吹く」として伝承されていることにもなったのであろうが、特殊な内容があつたのであろう。従つて、秋という季節と結びつく風は、秋風で良いのでありながら、「秋の風」というところに歌語としての特質があつても良いことになる。こういう場合の格助詞「の」は、一つは漢語表現の和語化にも用いられていて、「春苑」を「春の苑」と言う場合もあるのであるが、歌語として伝統的な「秋風」で捉えられない感情の表現と考えるべき特徴があるのであろう。

そもそも「秋の風」と言う歌語は、その歌の主眼になる言葉として全ての用例が用いられている。①の一五三五番では、風に人の訪れの前兆を認めるか否かと言う問題があるが、秋風の吹く空しさに歌の主眼がある。また、③の二二三一番は、萩の咲くことと蛸が鳴くことで秋の季節の到来を述べて、「秋の風」で季節を代表する表現としたものである。同様に額田の歌も、秋の風が吹いて動かす簾とうたわずに、簾を動かす風と言うのであるから、川口真喜子氏

が指摘する如くに主眼は「秋の風」である。このことは、「秋の風」と「秋の夕風」が短歌の第五句に用いられていることにも関わりそうである。即ち、風を歌のメインにした時には第五句に用いられたのである。

また、「秋の風」で引用した卷十の二例は、秋の雑歌に収められた「風を詠める」歌の三首中の二首であり、残る一首も、

秋山の木の葉もいまだ赤たねば今朝吹く風は霜も置きぬべく(二二三二)

とあつて、歌の眼目が「今朝吹く風」にある。

ちなみに「春風」は二例(四・七九〇、十・一八五二)あるが、「夏(の)風」も「冬(の)風」も用例がない。歌の対象として秋風が何故に多く詠まれたのであろうか。

岡部政裕氏は、春が雨と結びつき、秋が風と結びついていることを指摘している。<sup>(10)</sup>万葉集中では「春雨」が二〇例、「春の雨」が三例、そして「秋の雨」が一例である。

そこで「初秋風」(二十・四三〇六)を含め五十五首の「秋風」を分析していく時、一般的な秋に吹く風と言うAと、さらに意味を付加して歌語として用いられているBの如くに分類できる。

A 秋に吹く風

うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み思ひつる  
かも(三・四六五)

秋風に大和へ越ゆる雁がねはいや遠さかる雲隠りつつ  
(十・二二二八)

B 秋に吹く風にさらに意味を持たせているもの

I 冷たい風 寒さを感じる風

秋風の寒き朝明を佐農の岡越ゆらむ君に衣貸さましを  
(三・三六一)

君に恋ひしなえうらぶれわが居れば秋風吹きて月斜き  
ぬ(十・二二九八)

古衣打棄る人は秋風の立ち来る時にも思ふものぞ

(十一・二六二六)

II 強風、激しい風

秋風は過ぎてな吹きそ海の底奥なる玉を手に纏くまで  
に(七・一三二七)

秋風に山吹の瀬の響るなへに天雲翔ける雁に逢へるか

も(九・一七〇〇)

III 秋の到来を告げる風

霍公鳥声聞く小野の秋風に萩咲きぬれや声の乏しき  
(八・一四六八)

この夕秋風吹きぬ白露にあらそふ萩の明日咲かむ見む  
(十・二二〇二)

IV 物思いを募らせる風

うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み思ひつる  
かも(三・四六五)

あしひきの山辺に居りて秋風の日々に吹けば妹をし  
そ思ふ(八・一六三二)

V 七夕に結びつく風

天の川水陰草の秋風になびかふ見れば時は来にけり  
(十・二〇二三)

秋風の吹きただよはす白雲は織女の天つ領巾かも  
(十・二〇四一)

秋風になびく川辺の和草のにこよかにしも思ほゆるか  
も(二十・四三〇九)

VI 立秋を告げる風

秋風の吹きにし日よりいつしかとわが待ち恋ひし君そ  
来ませる(八・一五二三)

秋風の吹きにし日より天の川瀬に出で立ちて待つと告  
げこそ(十・二〇八三)

以上の如く見てきたとき、「秋風」が多岐にわたる内容  
を示していて、秋に吹く風と言う意味ばかりか、I冷たく

寒い秋風、II 強く吹く秋風、III 萩の咲く爽やかな秋の到来を告げる風、IV 秋思を導く風、そしてVとVIの如くに七夕の秋風と立秋等に関わっている。しかし、それらは秋風が眼目になっていくのでなくて、玉、雁、萩、物思い、七夕が主題に関わっていくのである。あくまで風は歌の主題を導く契機であつて、中心の素材になっていない。その眼目に風が関わるかいなかの点で「秋の風」と異なるのであるが、「秋風」は多面的な意味をもつて用いられた歌語である。

井出至氏は、秋風が吹くと恋人の来訪を期待して早くも下紐を解く風俗のあつたことを指摘して、次に引用する二首も参考に取り上げている。<sup>(11)</sup>

まだ長く恋ふる心ゆ秋風に妹が哭聞ゆ紐解き行かな  
(十・二〇一六)

初秋風涼しき夕解かむとそ紐は結びし妹に逢はむため  
(二十一・四三〇六)

卷二十の用例は、家持の歌であり、七月七日即ち七夕に吹く風を「初秋風」としたところに歌語としての特色がある。卷十の例は、風の音を妹の泣き声と解したことが特殊である。そして、この二首の七夕歌からは、秋風が吹くと直ぐに妹に逢えるので下紐を解くことに結びついている。

そもそも七夕歌は、その伝承と関わりを持っていて、とりわけ彦星と織女の逢瀬に関心を示している。VIで引用した一五二三番では、秋風が立秋と結びつき七月七日の逢瀬を近日のこととして期待している。同様に二〇八三番も秋風と立秋を結びつけて、近々に逢えることを期待して伝言を依頼している。七夕歌に用いられている「秋風」の用例からは、秋になって直ぐに逢えることを期待する契機の歌語として用いられていることが知られる。さらに川口真喜子氏は、「秋風」と「恋しき人を待つ心情」との結びつきを七夕伝承の享受から次第に生育してきたとする。<sup>(12)</sup>

このように秋の風を見てきた時、額田の秋風は、これらA Bに分類して引用したいかなる用例に最も当てはまるのであろうか。また、風が恋人の喩に用いられている、

息の緒にわれは思へど人目多みこそ 吹く風にあらば  
しばしば逢ふべきものを(十一・二三五九)

玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ね たちらねの母が問は  
さば風と申さむ(同・二三六四)

等は、風と待人との関係を認めていたから生じたものであろう。とすれば、万葉集の卷八、卷十、卷十一等では風が待人の比喩にもなるし、またその前提として待人がやってくる前兆にも理解して良いことになる。しかし、これはあ

くまで七夕伝説などの影響があつてからということであるから、額田王の時代にまで遡つて良いかどうか、ということになる。

また、「秋の風」と言う歌語に注目するとき、四八八番がはたして額田王の実作としていいのであろうか。初期万葉に位置するのであれば、それ以後の歌にそれを真似る、或いは伝統になつてゐる歌があつてもいいのであろう。その意味では、この節で①として引用した一五三五番の藤原宇合が女性に仮託した歌が参考になる。風が人の来訪をあらかじめ報せるものとして理解され、中西進氏や戸谷高明氏、井出至氏が額田歌で指摘してゐる風の空しさまでも、この秋の風は表現してゐる。<sup>(13)</sup>風の持つ空しさとは、額田の影響というよりも、同時代の作品であるために秋の風が共通した空しさを表現してゐる、と判断するのが適當かもしれない。とにかく「秋の風」とは、歌の主題と直接関わる歌語として短歌の第五句に用いられていたのである。

#### 四、すだれ動かし

額田王の歌は、土居光知氏が『文選』の張茂先（『玉台新詠』卷二にも有る）の情詩、

清風帷簾を動かし晨月幽房を照す

佳人遐遠に処り蘭室容光なし

から暗示を受けたのではないか、とした。<sup>(14)</sup>

それに対して、さらに小島憲之氏は佳人が秋の夜長を独り過ぐす妖艶な歌の源泉として『玉台新詠』『文選』から複数の参考例を指摘してゐる。<sup>(15)</sup>小島氏の指摘した中でも引用する『清商曲辞』（呉声歌 華山畿）の、

夜相思ふ。風の窓を吹きて簾動く、これ歎しき所の来れるか

を、稲岡耕二氏は額田が漢詩の翻訳に近いものとして歌作したとして取り上げている。<sup>(16)</sup>

「秋風」「秋の風」を歌う万葉歌は、五十七首を数えるが、その中で木下正俊氏の言う「佳人秋風裡の幽艶な歌境」として「題材のみ似て歌品は劣つてゐる」とする好忠の、

我が背子がきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしきかな（拾遺 恋三）

をも参考にしても<sup>(17)</sup>、額田王のそれと比較する作品がないのである。また、風と簾という組合せでは、既に風が恋人の喩として歌われている用例に引用したが、

玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ね たちちねの母が問はさば風と申さむ（十一・二二六四）

も存在していて、風が男性そのものにも解釈できる。とす

れば、風を待つことは、恋人の来る前兆でもあるし、また恋人そのものの君にもなる場合があつてよい。但し、鏡王女の返歌には、風に変身して訪れる君を配慮する必要がないので、「風をだに來むとし待たば何か嘆かむ」と王女に歌わしめることになる。

以上の如くに考えるとき、額田王が「秋の風吹く」の歌で示した初期万葉と言う和歌史の立場から例外的なこととして取り上げれば、歌の内容に中国文学の発想が顕著であるだけでなく、情緒もそれに近いことである。歌の情緒が情詩に近いということは、初期万葉と言う時期では極めて例外と言うべきことである。額田が中国文学に詳しかった証として、有名な春秋争いの長歌（一・十六）が取り上げられる。さらに漢籍の教養があつた証拠として、吉野に天皇が行幸された時に弓削皇子が大和に居る額田に「古に恋ふる鳥かも」（二一・一一）といつて質問してきた歌に、

古い恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如  
（一一一）

と、答えていることが取り上げられる。

蜀王の魂が霍公鳥となつて鳴いて飛んでいったと言う故事を踏まえているが、第五句に「わが念へる如」とあるので主観をも加えているところに単なる返歌に終わらせてい

ない特徴がある。この霍公鳥に示した漢籍の教養とそれを踏まえた作歌の非凡とが知られるのであるが、中国文学そのものが持つ風雅までも情緒的に表現したとは言えない。

また、春秋争いの長歌にしてもそれが中国の風雅である。しかし、春より秋が季節として勝っていることを、春が草が深く山に入れないが、秋が黄葉も青葉も手に採つて味わえるからだというのは、感性の豊かさとは非凡な才能を示している、中国詩の雰囲気ではない。

秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ  
青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山われは  
（一六）

引用した秋を良しとして展開した個性的な表現をもつても、歌「秋の風吹く」と単純に比較できない。即ち、秋を良しとする根拠に「そこし恨めし」とあるのは、額田の感性なのであって、中国文学の伝統に繋がる情緒ではない。

ここに至れば「秋の風吹く」の歌は、額田王の晩年でもある持等朝までに誕生していることがはたして可能だったのであろうか、という疑問を持つ。「すだれ動かし」とは、すだれも中国文学に負う素材であるが、秋の風と結びついて歌の雰囲気までもが中国詩に近いものになっている。そ

の意味するところ実作というより、額田に仮託した詞人といふべき創作であろう。但し、或る特定の中国詩から翻訳したといふことではなくて、簾と風の組合せからたまたま表現が呉声歌に近いのであるまいか。影響といふのであれば、

わが背子にあが恋ひ居ればわが屋戸の草さへ思ひうらぶれにけり(十一・二四六五)

も、歌の構成が近似して「優雅な閨怨の歌に作りかえた」と言う西郷信綱氏の指摘も頷かれる<sup>18</sup>。勿論「すだれ動かし」とは、閨怨の情緒を言い得た表現であるが、万葉で一般に用いられる「今夜もわが独り寝む」(七四)などという発想で誕生したものでなく、まさしく中国文学の伝統に学ぶものである。

「秋の風吹く」歌は、代作歌人の特徴である「御言持」と言う性格からかけ離れている。これまで縷々述べてきたことを配慮するとき、この歌の新しさこそ額田王後に求められていった時代の和歌の達成ではなからうか、と。

## 結 び

万葉に十二首の歌を額田王作として残していた。その中で巻四の一首は、題詞の性格から「額田王物語」として語

られていた話を伴う歌らしい。それは、題詞が「磐姫物語」に全く形式が同じだったからである。遙かなる伝説の女性の物語が磐姫だったとすれば、額田王物語とは歴史的な女性の物語である。一つは天智と大海人に愛された話、もう一つは額田と鏡王女が天智を競って愛したという艶やかな伝説である。天智と大海人に愛された話では、額田が才気に満ちた妖艶な女性であると共に彼女の挑発的なゆとりすら感じられる。一方額田と鏡王女の話は、公的な性格というよりも、私的なエピソードとも言うべき性格であった。額田が恋に悩む直向きで細やかな女性に描かれている。巻四「秋の風吹く」歌の題詞の特徴から背景にある物語の筋を考えてみた。

次に、歌の特徴を考察するために用いられた「秋の風」と「すだれ動かし」という言葉に注目した。「秋の風」とある歌語は、「秋風」と異なり歌の素材に止まらないで主題に正面から関わっていた。また、風が「すだれ動かし」とあることで、一人居る侘しさを閨怨の情緒に昇華させている。風と簾の組合せは、中国詩に学ぶものであるが、一人寝の寂しさを和歌の表現としては個性的に実現させたことになる。但し、題詞に額田王の歌とありながらも、「秋の風吹く」歌は、その特質を配慮する限り仮託された

ものといわざるをえない。「秋の風」が吹くことは、愛しい人の来る前兆でもあるし、「すだれ動かし」とあることで一人寝の寂しさを表現すると共に、いたずらに吹く風の空しさまでもが表現されていた。

注

- (1) 『古代和歌史研究(第三卷)』「秋風の歌」一九〇―一九六頁
- (2) 『折口信夫全集(第九卷)』「額田女王」四五六頁
- (3) 『古代和歌史研究(第三卷)』「代作の問題」一五六頁
- (4) 『万葉集の比較文学的研究』「額田王論」一四〇頁
- (5) 『古代歌謡全注釈(日本書紀編)』一七三頁
- (6) 「額田王」(『万葉の争点(上代文学会編)』所収)一三頁
- (7) 注6に同じ。
- (8) この問題については、川口真喜子氏の「秋の風吹く——額田王四八八番歌について——」(『帝塚山学院大学日本文学研究』十一号)に詳しい紹介がある。前兆説は、折口信夫氏「万葉の恋歌」(『恋の座』所収)、谷馨氏(『額田女王』)、中西進氏(『万葉集』講談社文庫)である、として  
いる。
- (9) 注8川口氏の論文に同じ。
- (10) 「秋の風吹く」をめぐって」(『国語と国文学』第五七卷第一号
- (11) 「秋風の嘆き」(『文学史研究』二九号)
- (12) 注9に同じ。
- (13) 中西氏『万葉集』(講談社文庫)
- 戸谷氏「額田王」(『万葉の歌びと(上代文学会編)』所収)
- 井出氏 注11に同じ。
- (14) 『古代伝説と文学』「漢詩の影響」三六頁
- (15) 『上代日本文学と中国文学(中)』「前期万葉集の歌」八九六頁
- (16) 『鑑賞日本の古典万葉集』「第一期」二二頁
- (17) 『万葉集全注(巻四)』二七頁
- (18) 『万葉私記第一部』「額田王II」一八一頁